

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330256

研究課題名(和文) 学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材の開発と検証

研究課題名(英文) Development and analysis of new Learning Materials that Combine Learning Processes with the History of Japanese Writing System

研究代表者

位藤 邦生 (ITO, Kunio)

広島大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：10069536

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,200,000円

研究成果の概要(和文)：従来「読むこと」の領域に位置づけられてきた古典学習材の学習指導を「書くこと」の領域に広げ、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の学習指導の新しいあり方を明らかにした。日本語そのものの歴史の変遷に着目することが、学習効果や教室文化の創造に寄与することを指摘した。このことは日本語学習のカリキュラムを構想する軸としての、発達心理学を背景とした従来の言語の獲得・学習の系統に加え、日本語固有の特質に根を持つ学習の系統の可能性を明らかにしたことを示す。また、思考の言語＝書記言語を学習者が手に入れるために教師がどんな工夫をしているのか、教師の実践知の中からそのための教育方法や手立てを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research explores a new way of conducting Japanese language teaching with [items related to traditional linguistic culture and characteristics of the Japanese language], considering Japanese classical materials as means of developing one's writing skills rather than reading skills. This study utilizes the history of Japanese writing system as an important perspective. Results of the study show the followings benefits:(1) A focus on the historical change of Japanese language helps create positive learning outcomes and classroom culture.(2) A new "axis" has been created to design the Japanese language curriculum. In other words, besides the orthodox manner of language teaching based on language acquisition and learning theories in the field of developmental psychology, this new approach rooted in the characteristics of Japanese language can be a new way of learning the language.

研究分野：日本文学

キーワード：教育学 国語教育 日本語学 学習材の開発 カリキュラムの構築 日本語書記史 伝統的な言語文化教育

## 1. 研究開始当初の背景

「伝統的な言語文化」の教育は、新国語科学習指導要領において「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」として新たに項目化された。しかし、小学校では平成 23 年に、中学校では 24 年に全面実施を迎えるに当たっても「伝統的な言語文化」や「国語の特質」の内実、ひいてはそこから何を学ぶのかの解明は十分であるとは言いがたい。とりわけ、本研究で取り扱う日本語の特質の一つである、歴史的背景を伴う書記の難しさ＝「書けなさ」に着目した日本語の変遷、変容についての研究は未開拓の状況である。これまでも日本語の特質の解明は進められてきたが、焦点となるのは口頭言語であった。書記言語については、言文一致に至る変遷を描いたものがあるものの、現在の学習者が自らの学習に活かし得る「書けなさ」の視点に立ったものではない。

この状況を受けて、本研究課題は、「書けなさ」に立脚した日本語特有の変遷、変容という側面からの書記史の解明と、それに基づく学習材の開発が急務であると捉え、またその妥当性を検証するためのカリキュラムの構築と検証が不可欠であるとの認識から着想された。

日本語書記の歴史においては、書記行為によって自らの思考を認識し深化させる過程にある文章の姿を捉えることができる。漢文では可能であっても日常生活の音声言語にはない思考の有り様を、日本語文たる仮名文で如何に表すか、これが古代人の「書けなさ」の一つであった。それはそのまま、現代の学習者がより高度な文章を書いていくそれぞれの段階で感じる「書けなさ」でもある。両者に通底しているのは思考の言語＝書記言語を手に入れる過程であり、学習者たちはこの点を通じて歴史上の書き手と思いを重ねることとなる。

## 2. 研究の目的

本研究は、伝統的な言語文化教育のための学習材の開発とカリキュラムの構築を目的とする。特に、学習者の「書けなさ」＝「日本語特有の書記の難しさ」という観点の導入によって、現代の学習者の学びのプロセスと日本語書記史とを統合しようとする点が本研究の特色である。具体的には、最新の日本語学・日本文学の知見に基づく書記史の解明、学習者の「書けなさ」の実態分析、「書けなさ」を自覚し克服するための学習材の開発、伝統的な言語文化教育のための学習材及びカリキュラム開発と検証、を中心とした研究を行う。

## 3. 研究の方法

「伝統的な言語文化」の教育のための学習材を開発するために、歴史的背景を伴う日本

語の特質を解明し、現代の日本語使用者（学習者）の「書けなさ」の問題を明らかにする。そのために、「書記史の解明」「学習者の「書けなさ」の実態分析」「学習材の開発と有効性の検証」を段階的に、一部は並行的に進捗させていく。

日本語書記史研究、またそれを解明する上で重要な視点となる書記言語研究は、日本語学において近年盛んになりつつある。しかし、特に「書記」の概念には未だ定説となるものがなく、所謂「表記」の範疇から出ないものも多い。本研究では、平安時代初期から明治時代にかけて作成された文章について、各時期の指標となる文章を選定した上で、個々の文章の書記言語の有り様を観察しうる指標を指定し、文章の分析とそれに基づく学習材への応用を進める。

また、本研究ではナラティブ・アプローチを採用し、教師に対する調査を実施する。特に、学習指導の実例に基づいて、教師・学習者が何を「書けなさ」と捉え、それに対してどんな工夫をしているのか、教師の実践知の中からそのための教育方法や手立てを明らかにする。

最終的には、これらの成果をもとに、日本語の特質を自らの言語生活の中に見出すための学習材を開発し、実験授業を実施することによりその有効性を検証する。そのために、カリキュラムの試案を構築し、有効性の検証のための指標とする。

## 4. 研究成果

本研究では、従来「読むこと」の領域に位置づけられてきた古典学習材の学習指導を「書くこと」の領域にまで広げ、「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」の学習指導の新しいあり方について、日本語書記史の観点から明らかにすることができた。

日本語書記史の解明においては、定番教材に加え、日本語の「特質」を学ぶための学習材の候補となる素材文を選定した。それらの文章では、主に文章の形式面（ジャンル・表記・文法・構成、等）と書記言語の有り様（書記言語における意味構造化・漢文の組み立てに依存した文章構造、等）という二つの側面から作品の言語分析を行うことで、素材文を教材化するための観点を抽出することができた。一例として、日本語書記史における「書けなさ」の背景について次のような考察を行った。『今昔物語集』（またそれに先立つ『三宝絵詞』（観智院本））は、漢字片仮名交りの表記体による説話集である。当該期は、漢文訓読における補助的／表音的な位置にあった片仮名が一つのまとまりをもった文章・作品に多く用いられ出す時期に当たる。特に、仏教的な色彩を持つ説話や鎌倉期に登場する聞書・抄物といった仏教の学問的活動、注釈的な活動に片仮名文が多い。それまで、宗教的な思考を実現する言語は漢文中心であった、その思考は個人やその世界の内（同一

コンテキスト内)で深められるものであった。しかし、説法、布教活動、講義の生きた形での記録といった場においては、漢文的な言語/思考とは異なる書記の実現が必要となる。日常言語により近い平仮名文でもそれは実現されないのであって、片仮名文は宗教(学問)言語「書く・考える」と日常言語「話す・聞く」の衝突の中で(和漢)混淆の様相を深めたとも言えよう。日本語書記史的な背景、あるいは言語の特質に関わる知見が可能にする“古典を「読むことから書くこと」の教材へと転換する”ことの意義は、学習者が日本語書記の史の変遷を辿ることで、書記様式/書記言語が思考様式/思考の言語と深く関わることを知ることにある。

一方、学習者の「書けなさ」の実態分析においては、国語教育における「書くこと」の学習指導の事例の考察を通じて、思考の言語=書記言語を学習者が手に入れるために教師がどんな工夫をしているのか、教師の実践知の中からそのための教育方法や手立てを明らかにした。先に見た日本語書記史の場合と同様、学習者の「書けなさ」に関わるのは思考様式の獲得であって、具体と抽象・比喩(存在の類比/関係の類比)等の思考様式に関わって行われる書記行為とともに学習者は自らの思考を認識し深化させていることが明確になった。

以上、二つの領域からの分析結果を統合し、現代の学習者が抱える「書くこと」に対して感じる難しさ、及び教師が「書くこと」の学習指導において行っている工夫を古典の文章上で取り上げ、課題として位置づけるために、日本語書記史の解明によって得られた観点を自覚的に取り入れた教材を開発した。

具体的には、『枕草子』を題材として、作品解釈と同時に「書くこと」の力の育成が達成される単元計画を設計した。そこで以下のような成果を得た。影印本を使用することで、句読点位置の違いがもたらす解釈の違いを感じ取り、言葉と絵で表現することを活動目標とした。その結果、学習者は教材文の内容だけでなく、「筆」(書きぶり)に着目して読むという視点を獲得することになった。

『枕草子』の特徴である「一般化」の概念を習得することを目標として、季節の中から主題を選び、具体例からその本質を述べることを目指した。『枕草子』における「一般化の筆」という特徴は、この本質観取という手続きと並べることで、より構造的なものとして浮かび上がる。日本語の文章史において、『枕草子』が一般・普遍・本質……といった概念を獲得して文章化に成功しているとは言い難いが、これらの概念を獲得途中にある学習者たちにとっては、一般化の概念の獲得という点で重なる部分を持つ教材であると言える。

本研究では、日本語そのものの歴史の変遷に着目することが、学習効果や教室文化の創造に寄与できることを示すことに成功した。

日本語学習のカリキュラムを構想する際の軸としての、従来の発達心理学を背景とした言語の獲得・学習の系統に加え、日本語固有の特質に根を持つ学習の系統の可能性を明らかにしたと言える。

以上のように、本研究では個別的な教室を対象として具体的な学習材を開発し、授業という教育活動を実現することには成功した。しかし、開発された学習材がより多くの教室において多様に利用され、学習材としての可能性を広げていくためには、多様な教室/学習者の実態を越えて古典と学習者を結びつけるための理論が必要である。本研究においては、日本語書記史を観点とした国語科教育内容論の構築に課題が残った。古典作品を選んで教育方法を添えただけでは学習材としては不十分である。今後、古典の学習材を配置しカリキュラムを構築するためには、歴史の変遷から見た「国語の特質」に重きを置く国語科教育内容論の構築が必要であることが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

森美智代、思想と方法の一体化と言語教育観の更新、リテラシー編集委員会『リテラシー』、査読あり、第16巻、くろしお出版、pp.51-60、2015

松崎正治、メンターとしての教師はいかに育ったか 女性教師の事例研究から、月刊国語教育研究、査読なし、第506号、pp.50-57、2014

磯貝淳一、『東山往来』の文体 書簡文体と注釈文体とを繋ぐ問答形式、人文科学研究、査読あり、135輯、pp.49-76、2014

磯貝淳一、和化漢文用字法に見る「問い」と「疑い」 古記録・文書における判定要求の一用法の検討から、ことばとくらし、査読あり、26号、pp.15-23、2014

磯貝淳一、「書き方」はどのように学ばれてきたのか 教科書としての往来物の編纂と文体の問題 (平成25年度新潟県ことばの会講演要旨)、ことばとくらし、査読あり、26号、pp.51-53、2014

森美智代・高橋典子、「物語りの因果性」に関する考察 物語教材の授業における「意味づけ発問」の分析から、福山市立大学教育学部紀要、査読あり、第2号、pp.117-125、2014

谷口直隆、「育成すべき資質・能力」を踏まえた国語科の在り方についての一考察、修大教職フォーラム、査読なし、第7号、pp.23-39、2014

森美智代、物語体験に関する一考察 物語り的な歴史哲学の視点を手がかりとして、福山市立大学教育学部紀要、査読あり、第1号、pp.103-110、2013

森美智代、文学体験に関する理論的検討  
ルソーによる「解釈から証言へ」の移行  
に着目して、国語教育思想研究、査読あり、  
第7号、pp.42-50、2013

谷口直隆、短期大学におけるキャリア教育  
の現状と課題 鈴峯女子短期大学キャ  
リア創造学科のカリキュラム構想と授業  
開発、鈴峯女子短期大学人文社会科学研  
究集報、査読なし、第60集、pp.37-55、  
2013

松崎正治、協働性・共同性・同僚性と教  
師の成長、国語科教育、査読あり、第71集、  
pp.112-114、2012

松崎正治、時空を隔てたものにつながる  
レッスンとしての伝統的な言語文化の授  
業、『東書Eネット 教材研究・教科情報・  
実践事例』、査読なし、pp1-2、2012

磯貝淳一、醍醐寺蔵『探要法花験記』日  
本・中国両部の比較 和化漢文用字法の共  
通基盤解明に向けて、国文学攷、査読あり、  
215号、pp.21-32、2012

磯貝淳一、「書けない」をどう書いてきた  
か「日本語書記史」から教科書教材を見  
る、国語科教育(パネルディスカッション  
提案内容掲載)、査読あり、第71集、  
pp.9-10、2012

森美智代、国語科の「話し合い」活動を  
支える理論の検討 ハーバースのコミュニ  
ケーション論を中心として、国語科  
教育、査読あり、第72集、pp.17-24、2012

[学会発表](計26件)

谷口直隆、わたしを振り返るコミュニ  
ケーションの授業、第2回「教師教育と演劇  
的手法」研究会、2015年3月1日、東京  
国際フォーラム(東京都)

磯貝淳一、前田本『三宝絵』の文体「漢  
字仮名交り文の真名化」の意味を問いなお  
す、広島大学国語国文学会、2014年7月  
12日、広島大学(広島県)

磯貝淳一、接続表現からみる日本語文章  
史、新潟大学人文学部国語国文学会(講演)  
2014年9月27日、新潟大学(新潟県)

磯貝淳一、『伊曾保物語』の文体再考 天  
草版・国字本の比較から、新潟県ことば  
の会、2014年11月22日、新潟大学(新  
潟県)

森美智代、国語科における対話概念の理  
論的検討、第126回全国大学国語教育学会、  
2014年5月18日、愛知教育大学(愛知県)

谷口直隆、コミュニケーション教育 メ  
タ認知と医療、日本歯科医学教育学会医  
療コミュニケーションファシリテータ養  
成セミナー第5回フォローアップセッシ  
ョン(招待講演)、2014年7月3日、九  
州歯科大学(福岡県)

牧戸章、「ことばの学び」を支える言語的  
コミュニケーション理論の検討「合意形  
成」「システム」「承認」「再配分」をキ  
ワードに、第124回全国大学国語教育学

会、2013年5月19日、弘前大学(青森県)  
牧戸章、協働(コラボレーション)で書  
く 教室で文章表現指導をすることの意  
義、第125回全国大学国語教育学会、  
2013年10月26日、広島大学(広島)

磯貝淳一、注釈文体の系譜 古往来にお  
ける『東山往来』の位置づけを中心に、  
新潟大学言語研究会、2013年5月13日、  
新潟大学(新潟県)

磯貝淳一、疑問表現からみた和化漢文の  
文体 仏家「記録文」の位置づけをめぐ  
って、第109回訓点語学会、2013年10  
月20日、東京大学(東京都)

磯貝淳一、「書き方」はどのように学ばれ  
てきたのか 教科書としての往来物の編  
纂意識と文体の問題、新潟県ことばの会  
(講演)、2013年11月24日、新潟大学  
(新潟県)

森美智代、自己の「物語り」を描く文学  
的文章教材の授業「わらぐつの中の神  
様」を通じた学習者の変容、第124回全  
国大学国語教育学会、2013年5月19日、  
弘前大学(青森県)

谷口直隆、国語の授業における演劇的要素  
についての一考察、第125回全国大学国  
語教育学会広島大会、2013年10月26日、  
広島大学(広島)

位藤邦生、学習材としての『古事記』の  
魅力、第24回日本教材学会、2012年10月  
21日、福山大学(広島県)

松崎正治、同僚に学びながら教師になっ  
ていく 初任期から中堅期への成長、第22  
回日本教師教育学会、2012年9月9日、  
東洋大学

牧戸章、「きょうどう」で書く 書くこと  
の「学び合い」のあり方を求めて、第123回  
全国大学国語教育学会、2012年10月27  
日、富山大学(富山県)

牧戸章、言語的コミュニケーションへの  
参加構造:「学び合い」の場における「関  
係性」を視点として、第122回全国大学国  
語教育学会、2012年5月26日、筑波大  
学(茨城県)

磯貝淳一、日本語書記史の観点からみた  
『竹取物語』教材化の可能性、第24回日  
本教材学会、2012年10月21日、福山大  
学(広島県)

森美智代、「物語体験」に関する理論的考  
察 ハンナ・アーレントの「コンパッショ  
ン」を中心に、第123回全国大学国語教  
育学会、2012年10月27日、富山大学(富  
山県)

谷口直隆、コミュニケーション教育のカ  
リキュラム - 国語の授業を手がかりに -、  
第15回日本コミュニケーション学会中国  
四国支部大会・第7回医療コミュニケーシ  
ョン教育研究セミナー、2012年12月9日、  
広島大学(広島)

[図書](計6件)

森美智代他、山元隆春編、『教師教育講座』  
II 期第 4 巻 中学校国語科・高校国語科教育論、協同出版、全 443 頁 (pp.47-60)、  
2014

松崎正治他、田近洵一・鳴島甫編『中学校・高等学校 国語科教育法研究』、東洋館出版、全 208 頁 (pp.146-151)、2013

松崎正治他、全国大学国語教育学会編、『国語科教育の成果と展望』、全 574 頁 (pp. 447-454)、学芸図書、2013

甲斐雄一郎・森美智代他、全国大学国語教育学会編、『国語科教育の成果と展望』、全 574 頁 (pp.55-60)、学芸図書、2013

松崎正治他、グループ・ディダクティカ編『教師になること、教師であり続けること 困難の中の希望』、勁草書房、全 262 頁 (pp.115-13)、2012

森美智代他、細川英雄編『言語教育とアイデンティティ ことばの教育実践とその可能性』、春風社、全 266 頁 (pp.34-39)、2012

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

位藤 邦生 (ITOHI, Kunio)  
広島大学大学院・文学研究科・名誉教授  
研究者番号：10069536

### (2)研究分担者

松崎 正治 (MATSUZAKI, Masaharu)  
同志社女子大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：20219421

牧戸 章 (MAKIDO, Akira)  
滋賀大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40190334

磯貝 淳一 (ISOGAI, Junichi)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号：40390257

森 美智代 (MORI, Michiyo)  
福山市立大学・教育学部・准教授  
研究者番号：00369779

谷口 直隆 (TANIGUCHI, Naotaka)  
鈴峯女子短期大学・保育学科・講師  
研究者番号：90635947

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：